日本経済新聞

【2011年10月1日付】

授業の司会は児童

「グループで話し合いをします。時間は5分間です」。横浜市立白幡小学校の2年生の授業でこう呼び掛けたのは先生ではなく、2人の児童。黒板の前に机を置き、クラスメートと向かい合わせに座る司会役だ。

白幡小では2009年度から、全学年原則すべての授業で児童が司会を務める。「子どもたちが主体的に授業にかかわり、学習してほしい」(永池啓子校長)という狙いからだ。そのため司会は日直のようにあいさつだけでなく、その日の授業の目的を確認したり、子どもたちの意見をまとめたりもする。

「～という意見が多いですね。みなさんはどう思いますか?」。各教室にこんな司会のマニュアルのような紙が張られている。低学年は先生の手助けが必要だが、子どもにとっては楽しみの一つ。2年生の浅沼怜奈さん(8)は「司会はみんなの様子が分かるのが面白い。緊張なんてしない」と笑顔で話す。

高学年になると司会が授業全体を取り仕切ることもある。9月中旬、5年生のクラスでのスピーチをテーマにした授業は「1人でスピーチの練習」→「グループに分かれて聞き合う」→「ポイントを発表」→「もう1度1人で練習」という流れで授業が進む計画だった。

グループでスピーチを聞き合う時間が終わりに近付いたころ、まだ終わっていないグループが多いのを察した司会の小林当君(10)は、ペアを組んだ海野碧生さん(10)に「もう少し待とうか」と小声で提案。ポイント発表では「私のスピーチをみんなに聞いてほしいけど、いいですか」というクラスメートからの要望を司会が了承し、教室内は大いに盛りあがった。

その結果時間がなくなり、1人での練習は取りやめた。担任の渡辺誠先生は「計画に縛られることなく、司会がクラスの雰囲気を見ながら修正できた。マニュアルは確かにあるけれど、司会が臨機応変に授業を展開することがあり、びっくりさせられる」と話す。

司会の2人の顔にも満足感が漂う。小林君は「授業を面白いものにしていくのが楽しい。盛り上げることができたかな」。「みんなの手が挙がらないときが一番難しい」と話す海野さんも「今日は点数を付けるなら99点」と喜ぶ。

こうした司会を置くことを提案した京都女子大学の井上一郎教授は「司会が先生の単なる手伝い役になっては意味がない」と指摘する。渡辺先生のクラスでも貼り紙の形式に縛られるケースがあったため、司会のポイントだけをまとめた紙に取り換えた。

この2年半で子どもたちの話を聞く姿勢が変わった。「司会の大変さをみんなが分かっているので、自然と協力しようという雰囲気が生まれる」(渡辺先生)。クラスの一体感を味わえるのが司会の魅力の一つのようだ。

(岩本隆)

子ども新景

仕切り楽しく、聞く力つける

司会2人が声を合わせて授業を進行する(横浜市の白幡小学校)

本校での自主的学習力を育てる様々な取組が日本経済新聞の「PLUS　1子どもニュース」に取り上げられました。